いので此方面から保護され、其增加も砧接等によりまして計られますから結局は利害の差はないかも知れませぬ。

「源平桃。」桃には、五月桃、半夏桃、白桃等と我が國在來のものに加へて此頃は、「アムスデンジューン」、「アレキサンダー」、天津水蜜桃、上海水蜜桃金桃等と外國種や新種を加へて色々澤山にありますけれども重に花よりは果實を目的に栽培せられて居るのであります。是等は色々其花の色を異にして居りますが、此外に源平桃とて、一本に紅白の咲き分けのものがあります。或花は純白、或花は純紅、そして時には一花に紅白の雜り色を見せます。是は多分紅色種に白色種を合して生じた雜種であらうと思ひますが、研究をして見ますと遺傳の方則上の面白い實驗材料となり得るものと思はれますが之は他日折を見て此事に關して書いて見たいと存じます。

「實咲きの花。」もと太陰暦によつた頃の雛節句たる三月三日は桃花の花を自然に見られる頃でありますが今の東京の雛祭りには自然の花はまだ莟が堅くて咲く所でありませぬ。それで此時に用ふる花は、是等の枝を切り取りまして溫室内で開かせますのです。つまり四月に開く花は昨年の秋の末に早く出來て越冬して翌春暖氣の至るのを待つて居るのでありますから此枝に濕氣と溫度とを與へますと、潛伏して居る莟は既に春暖の頃になつたと僞られて、盛に活動を始め遂に開花するに至るのです。是は此に一旦寒くなつた後又小春頃の暖かさに返り咲のするのと同じ理由なのであります。

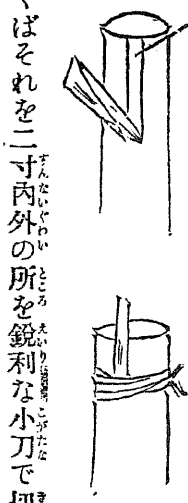
梅

小寺彌彦

梅を盆栽にして樂まうと云ふには、やはり實生のものがよい。獨り梅にかぎらず、實生のものを、充分手入したのでなければ逸品は得られない。然

るし梅の種子を蒔てから、花の咲く迄には、少くも、十四五年はかゝると、思はなければならぬ。その上實生の梅をそだてると云ふ事は、一寸、素人には困難であるから、寧ろ壓條又は接木をするのがよい。

接木にはいろ〳〵の方法がある、それ〴〵木によつても異なるから、相當な經驗と熟練とが入る。接木の事をくわしく云ふは一朝一夕の事でないからたゞ左に簡單な一法を述べて見やう。失敗すると思つて試みて成功すれば好い慰みである。先づ發達の盛んな實生苗、杏、李、桃等を砧木にとる同種の梅はあまりよろしくない。砧木をとりたくばそれを二寸内外の所を鋭利な小刀で切る切口はよくけづりて滑かにしてをかねばならぬ。又



小刀にて適宜に上皮を切りはなし卽ち別圖の如くなし之れに接がんと欲する穗をさし込み接蠟をぬり蠟糸にて固く纏結して置けばよい。接蠟を作るには大約

松脂　二〇
蜜臘　一〇
獸脂　五

の割合に混ずるのである。卽ち先づ松脂を鍋にてとかし、蜜臘を加へ、最後に、獸脂をいれ、暫時煮て、鍋を冷水中に入れて、冷しつゝよくかきませる時は、乳白色のものが出來る。又蠟糸とは太い木綿糸を、蜜臘を溶したる中に數分間浸して後取出して用ゐるのである。接木をする好時期は春の彼岸前頃がよろしい。一番梅は接木をする時節が、早くてよいのである。盆栽にする梅の大さは、勿論一定しないが、日本の室などで、一寸、机邊にでも、置くのは、五寸乃至八寸位が適當である。梅の模樣ある鉢に、梅を植ゆる時は、その模樣を

表に出さぬやうにすると云ふ事があるが、古人の言を一概に排斥するはよくないがさりとて墨守するにもあたるまい。次ぎに梅を培養するに當り注意すべき事を擧げて見やう。

一月　一月咲かせんと欲するものは十二月より温室に入つてゐるから此の月も温室よりとり出し直ちに嚴寒にあてゝはいけない。晝は温暖な所に置き夜は又温室にもどす注意が大切である。温室内にては灌水を怠らぬやうにせねばならぬ。

二月　温室に在り此の月下旬には大抵の野生のものも開く、温室にて早咲せしものは、開花後日光の直射する所へ假に移植するがよい。灌水は天氣晴朗の日に午前十一時頃より午後二時までの間に一回寒き折は温室外のものは朝に灌水するもよし夕方施せば翌朝までに氷る事がある、二月下旬から梅の挿枝をとり、切口を水中又は泥中に二三日浸し床にさし挿木を行ふ事が出來る。

三月　此の月上旬も挿木によろしい。下旬にやゝ芽をふき出すから枝及び根の刈込をなし假植より本植にする。温室で開花をしたものは、枝を半ば刈り込みて、土地に移植しなければいけない。梅を翌年開花せしめんには、花が散り漸く芽の生じた時掘りとり、太き根を切り去り、枝を芽の生ずべき部分を、二ツ三ツ殘し切り去り根の切口を鉢底にしかと押つけ、よく篩ひたる土を、根にすきまなく振り込み、小根のいたまぬやう、棒にて固め、半ケ月乃至一ケ月間日蔭に置きて、そろ〳〵芽の延る頃、割肥又は油粕又は牛乳を與へるとよい。鉢は根のやうやく入る位の小なるものゝ方がよろしい。下枝を太くなさんには、春時その枝を充分生育させ七八月に適當な所より切ると大に生長するものである。

五六月　五月下旬一回、六月下旬一回、芽を摘むのがよい。春より七月以内に生ずる芽は、悉して發生をしてはいけない。土用芽も秋に生ずる芽も、摘去らねばならない。梅雨中は、濕りがちのもの

なれば、よく〳〵乾燥したる時に灌水せねばならぬ。肥料は梅雨中に施してはいけない。梅雨の交枝葉に虫が生ずる事がある。此の場合には百倍の硼酸水を用ひて驅除するがよい。

七八月　剪枝、總じて灌水は朝夕二度行ふがよい。水をたやすは、大の禁物にて、十年の苦心も、一日灌水を怠れば何の功もない。一體、梅は細砂質の粘土を好むものであるから、鉢に植ゆる時、鉢底四五分位、粗砂をいれ、その上に少量の土をおき、植ゑるのである。又は鉢の三分の一位まで消炭を入れる、即濕潤な地より水はけのよい所を梅は好むものである。水はけのよい鉢は一層灌水に注意しないと失敗する。一寸、話が岐路に入るが、苔をつけるのは、苔を日光によくさらし、細砂の如くなし、篩にかけたるを、梅雨中、鉢の土上に散布し、輕くその上に土を被ひ水をかけて置くと三週間位で見事に出る。苔がある時は、多少日光が鉢の土に直射しないから、灌水の都合がよろしい。

十一月　初旬は、春期になせし如く、根を切り、栽込み充分日蔭に置く。

十二月　此の月は來年一月、開花せしめんと欲する梅を、温室に入れる。温室に入れるのは、樹勢を損するものであるから、若木を用ひなければならぬ。古木を温室に入れるのは、往々枯死を早める原因となる事がある。偖て、温室に入るゝには、先づ豫かじめ、戸外の日光の直射する、風通しよき所にて、充分外氣にさらし、後、温室に入れるのである。温室に入てからも五六日間は火氣を用ひず、その後はじめて火を用ひるのである。火氣の度及び温室の構造注意等は凡て省く。大體まあ以上の如くである。次ぎに梅の枝振りを直さんには、銅線を用ゆるがよい。銅線に紙に墨を塗りて（又は澁にてもよろし）まきつけたものを用ゐる。枝振りを直すは、春がよろしい。秋は、痕が殘りてうまくゆかない、まづ、枝振りを直さん

とする時は、豫め、灌水を節して、置かなければならない。一般に枝をねじる場合の如きは、決して、中途で、力をゆるめてはいけない。ゆるめると龜裂を生じ枯死するものである。

梅を植ゑかへるのは、葉の伸び始めてよりは、決して行つてはいけない。必ず、落葉より落花迄の間にしなければならぬ。卽ち、十一月より三月迄の間が最もよろしい。植かへる時は根を充分にきり、例へば、一本特別に成長する枝があらば、必ず、之れに相當する根があるものであるから、枝振を正し第一條件として根を正さねばならぬ。若木は年々移植し、且根を切るがよいが、古木は隔年位にし、春はつとめて、日當りよき所に置かなくてはならぬ。移植する場合には、根全體を、よく、清水にて、洗ひかはかして、後植ゑるがよい。移植後直ちに雨にあてるは大禁物である。肥料、自然の沃野に生長するものと異なり、方寸の盆裡にあるものなれば、肥料を充分にしなければ、決して好結果は得ない。

然し過ぎたるは尙及ばざるが如しで、葉が黑味を帶びて來らば、肥料過多の證據であるから、節減せねばならない。肥料でも灌水でも、決して樹頭より灌いではならぬ。根の周圍に施す心掛が大切である。肥料には下肥、堆肥、干鰮、油粕等で一番下肥は有功であるが一般に用ゆる譯にはゆかない、殊に盆栽物などには用ゆる事は出來ないから油粕を代用してもよい。肥料を施す時節は、開花前卽ち十一月より二月の間、開花後に一回、それは結實の爲めであるから、結實に、重きを置かない場合ならば、施肥しないでもよろしい。夏の土用過ぎ、濃厚な油粕液をやる。初夏に肥料を施すと虫害にかゝる事があるから、注意しないと害虫の爲めに枝葉を害せられる。又一法には、暑中に一度、晩秋に一度、寒中に一度、充分に乾鰮、鯡粕、油粕等を旋肥する法もある。

述べたい事はまだ澤山あるが私の切に希望する所は、樹木又は盆鉢に數千金を投じて、骨董的に愛玩するのではなく、緣日の植木屋からでも何でもよいから、一鉢をあがなはれ家庭的娛樂の一つとして樹木の盆養を御勸め致したいのである。